

時代の節目を乗り越え、  
六百年の歴史を刻む

瑞雲萬歳山

大寧護國禪寺を

訪ねて

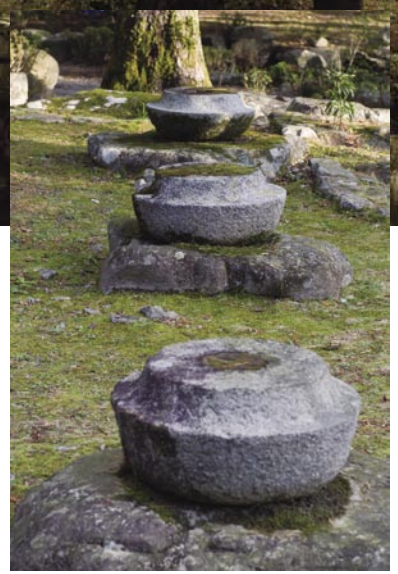


山号額と寺号額  
本堂入口に掲げられた「山号額」と「寺号額」。



取材・文：小林桂子 撮影：小倉直子

本堂 寛永17(1640)年の野火で焼け残った衆寮(僧の寄宿寮)を文政12(1829)年に移築したもの(県指定有形文化財)



山門の礎石  
山門は、寛永17(1640)年の野火で焼失したのち、延宝5(1677)年益田元堯公によって再建されたが明治末期に倒壊、現在は礎石が残るのみ



取材にご協力をいただいた皆様。五十三世・岩田啓靖老師を中央に、右が大寧寺寺務の大庭龍徳氏、左が全書青広報委員の伊藤暢道師

応永十七(一四二〇)年、大内家の支族鷲頭弘忠公が石屋真梁禪師を開山に迎え開創した。かつては六百数十ヶ寺に及ぶ末寺を有する僧録寺として栄え、大内氏断絶後も毛利氏の菩提寺として繁栄の道を歩む。しかし明治以降、藩の庇護は断たれた。今年、開創六百年を迎える大寧寺では、記念行事に向けての様々な取り組みが進められている。

時代と共に栄え、  
移り過ぎた六百年の歴史

創建は、今から六百年前の応永十七(一四二〇)年。周防長門(現、山口県)の守護大名大内氏の支族、鷲頭弘忠公が石屋真梁禪師を開山に迎え、開創した。それからの永い歴史の中、いくつもの時代の節目を乗り越えてきた僧院である。

石屋禪師が南北朝に分かれた皇室を合一する使僧として尽力したことを礎に、かつては全国六百数十ヶ寺に及ぶ末寺を有する僧録寺として栄え、その壮麗美観は「西の高野」と称されたほどであった。しかし、山口の栄華を極めた大内氏が滅びると共に

に、大寧寺もまた焼き払われた。大内氏三十一代当主大内義隆が、その家臣、陶晴賢の謀反によって菩提寺である大寧寺まで逃げ延び、この地で自刃したのは天文二十(一五五二)年(大寧寺の変)。その後、陶氏を破った毛利元就によってお寺は再建されたが、徳川幕府による宗教政策や寛永十七(一六四〇)年の野火による再度の焼失、さらには明治維新の神仏分離政策など、数々の時代の波乱を乗り越えながらも、明治以降は藩の庇護を失い、繁栄は終焉を告げた。今年、開創六百年を迎える大寧寺では、波乱の時代の中で失われた山門をはじめ七堂伽藍の再建や墓碑の整備など、かつての姿の再現に向け